

展覧会歴 | List of Exhibitions

主な展覧会

1991	「村上隆」青井画廊（大阪） 「賛成の反対なのだ」細見画廊（東京）[ex.cat.]
1992	「アノーマリー」レントゲン藝術研究所（東京）[ex.cat.]
1993	「村上隆：なんでもない日、万歳！」広島市現代美術館 [ex.cat.] 「ザ・ギンプラート」銀座（東京）[ex.cat.]
1994	「明日はどっちだ（Fall in Love）」スカイザバスハウス（東京）[ex.cat.]

漫画は本来、「本画」に対して劣位な画として「漫」な画としてきたんですけど、いまやカルチャアのハイもロウも日本にはないでしょ。ハイカルチャアなんて見えない。アートがいつしか自立できなくなって争点が見えなくなってる。その争点を導き出す大見得としてマンガ対アートをもってきたんです。——村上隆

「Artist Interview：村上隆」、「美術手帖」1994年11月号、p. 181

1995	「村上隆」ギャラリー・ベロタン（フランス、パリ） 「トランスカルチャー」(「第46回ベネチア・ビエンナーレ」) パラッツォ・ジュステニアン・ロリン（イタリア、ベネチア）[ex.cat.]
1996	「村上隆」フューチャー・インク（米国、ニューヨーク） 「DOB君、こんにちは！」キリンプラザ大阪 「ワンダーフェスティバル96夏」東京ビッグサイト 「第2回アジア・パシフィック・トリエンナーレ」(オーストラリア、ブリスベン）[ex.cat.]
1997	「移動する都市」ウィーン分離派会館（オーストリア）、[1998] CAPCポルドー現代美術館（フランス）、[1998] P.S.1現代美術センター（米国、ニューヨーク）、[1999] ルイジアナ近代美術館（デンマーク、フムレベック）、[1999] ヘイワード・ギャラリー（英国、ロンドン）、[1999] キアスマ現代美術館（フィンランド）、[1999] バンコク市内各所（タイ）[ex.cat.]
1998	「バック・ビート」プラム&ポー（米国、カリフォルニア州サンタモニカ） ★「どないやねん！：現代日本の創造力」フランス国立高等美術学校（パリ）[ex.cat.] ★「テイストと探求：1990年代の日本美術」ニューデリー国立近代美術館（インド）、[1999] マリナ都立美術館（フィリピン）[ex.cat.]
1999	「意味の無意味の意味」バード大学キュラトリアル・スタディーズ・センター（米国、ニューヨーク）[ex.cat.] 「ふしぎの森のDOB君」バルコギャラリー（東京）、バルコギャラリー（愛知、名古屋）[ex.cat.] 「カーネギー・インターナショナル 1999/2000」(米国、ペンシルベニア州ピッツバーグ）[ex.cat.] 「日本ゼロ年」水戸芸術館現代美術ギャラリー（茨城）[ex.cat.]

拝啓 日本人。いま君は生きている。(中略)
東京に生きる人間の剥き出しの心、無意味がリアルな脱西洋的な社会
①子供っぽくて②貧相で③アマチュアで、でも、そんな一見ネガティブなガジェットが、一転してTOKYOのオリジナルになってきたのだ。
東京の言語をインターナショナルな言語につなげていく、TOKYO POPが作り始めたオリジナル。
その姿をじっくりと見てほしい。——村上隆

「拝啓 君は生きている—TOKYO POP宣言」、「広告批評」1999年4月号、p. 59

日本の大衆文化に根差した村上のアートは、日本のファッション、アニメ、音楽、電子機器が大きな存在感を示しているメディア主導のグローバルポップの時代において、国境を超えたコミュニケーションを築く力がある。——エドワード・M・ゴメス

 "The Fine Art of Biting into Japanese Cuteness," *New York Times*, July 18, 1999.

2000	「カイカイキキ スーパーフラット」ISSEY MIYAKE MEN / AOYAMA（東京） 「セカンド・ミッション・プロジェクトK02」P.S.1現代美術センター（米国、ニューヨーク） 企画「スーパーフラット」バルコギャラリー（東京）、バルコギャラリー（愛知、名古屋）[ex.cat.] 「世界の果ての絵画」ウォーカー・アート・センター（米国、ミネソタ州ミネアポリス）[ex.cat.] ★「ゲンダイ：日本の現代美術—身体と空間の間」ウジャドゥスキー城現代美術センター（ポーランド、ワルシャワ）[ex.cat.]
------	---

日本は世界の未来かもしれない。そして、日本のいまはsuper flat。社会も風俗も芸術も文化も、すべてが超2次元的。——村上隆

「Super Flat宣言」、「スーパーフラット」東京：マドラ出版、2000年、p. 4

2001	「召喚するかドアを開けるか回復するか全滅するか」東京都現代美術館 [ex.cat.] 「村上隆：メイド・イン・ジャパン」ボストン美術館（米国、マサチューセッツ州） 「ウィンク」グランドセントラル駅（米国、ニューヨーク） ★企画「スーパーフラット」ロサンゼルス現代美術館別館パシフィック・デザイン・センター（米国、カリフォルニア州）、ウォーカー・アート・センター（米国、ミネソタ州ミネアポリス）、ヘンリー・アートギャラリー（米国、ワシントンシアトル）[ex.cat.]
------	--

ポップ以降の芸術運動の名前として「スーパーフラット」は最も優れたものである。(中略)
それはマーケットに精通していて、レトロな響きがあり、皮肉っぽい。
スーパーフラットは、絵画の真実はその平面性に宿るという1970年代のポストミナル以前に盛り上がった古き批評的議論を踏襲していながら、その歴史を脇に押し退けているようだ。
「へえ？ でもスーパーフラットの方が真実だ。スーパーフラットは超真実だ」と言わんばかりに。——クリストファー・ナイト

 "Flat-Out Profound," *Los Angeles Times*, January 16, 2001.

私はアートとエンターテインメントの接点を探しています。(中略)
ファインアート・シーンの慣習をヨーロッパとアメリカで学び、美術館より映画館のほうが遥かに人を集めることが分かりました。
美術館は、オペラのように古いメディアです。だから一般の人たちのためにグッズを製作することに興味があるのです。——村上隆

 Peter Marks, "A Japanese Artist Goes Global; Far-Flung Helpers Meet Demand for Takashi Murakami's Paintings," *New York Times*, July 25, 2001.

2002	「カイカイキキ：村上隆」カルティエ現代美術財団（フランス、パリ）[ex.cat.] ★企画「ぬりえ」カルティエ現代美術財団（フランス、パリ）
------	---

明治維新以降、日本の美術は西洋美術史のアウトラインに乗っ取り、輪郭線に気を配りつつ、しかしその意味も分からないまま、色をせっせと塗ってきました。(中略)
しかし文化とは色を塗る行為では無く、輪郭を造り出す事である、ということをしばらく忘れていました。(中略)
メインとサブのカルチュラルディスタンスがなかった日本という国が描いた「ぬりえ」。この、新しい美術の芽を、ジャポニズム発祥の地、パリにて行う事に意味があると思います。——村上隆

村上隆、エレヌ・ケルマクター「村上隆インタビュー／改訂版」(リフレット)、[Kaikai Kiki: Takashi Murakami] 東京：カイカイキキ、2002年、p. 18

2003	「ハビネス：アートにみる幸福への鍵」森美術館（東京）[ex.cat.]
2004	「リバブル・ビエンナーレ2004」(イギリス）[ex.cat.] 企画「トーキョー・ガールズ・ブラボー」マリアン・ボースキー・ギャラリー（米国、ニューヨーク）

理解のある批評家であれば、ここにオタクの壮大でありながら、不可解で自己満足的な世界に対する狡猾な批評を見つけることができる。
《マイ・ロンサム・カウボーイ》と、母乳を絞り出している彼の仲間《ヒロボン》(1997)は、フィギュアというオタクのアイテムを、オタクの「純粋主義者」が見てもグロテスクだと感じるプロポーションにまで誇張することで、(中略)アニメとマンガのサブカルチャーに潜む未熟な強迫観念を風刺している。
しかし、同時にその強迫観念を称賛しており、批評と賛美の境界線があまりにも洗練されているため、その違いを追求することにあまり意味はないようだ。——キティー・ハウザー

 "Superflat." *Artforum*, October 2004, p. 286.

2005	★企画「リトルボーイ：爆発する日本のサブカルチャー・アート」ジャパン・ソサエティー・ギャラリー（米国、ニューヨーク）[ex.cat.]
------	---

村上氏は「リトルボーイ」展で国家単位 of の精神分析を試みた。(中略)
同展の鑑賞者は、日本の歴史と文化に対して今まで抱いていた理解が、深く揺さぶられる体験をするだろう。——ロバータ・スミス

 "From a Mushroom Cloud, a Burst of Art Reflecting Japan's Psyche," *New York Times*, April 8, 2005.

2007	「©MURAKAMI」ロサンゼルス現代美術館（米国、カリフォルニア州）、[2008] ブルックリン美術館（米国、ニューヨーク）、[2008] フランクフルト現代美術館（ドイツ）、[2009] ヒルバオ・グッゲンハイム美術館（スペイン）[ex.cat.] 「リフレクション」ピンチュク・アート・センター（ウクライナ、キエフ）[ex.cat.]
------	---

村上のスペクタクルな物語の核心には、社会に渦巻く飽くなき消費欲のアレゴリーが潜んでいる。巨大化を遂げた《ゲロタン》が、この尽きることのない欲望を、犠牲的な死に向かう圧倒的なイメージで体現している。——吉竹美香

"The Meaning of the Nonsense of Excess," ©MURAKAMI, Los Angeles, CA: Museum of Contemporary Art, 2007, p. 111.

村上とルイ・ヴィトンのブティックがロサンゼルス現代美術館での回顧展に併設されたとき、美術館の純粋性を死守したい守護者たちは激怒した。(中略)
だが、このブティックは、村上の芸術——アート／商業、ハイ／ロウ、パブリックブランド／自己表現、大量生産／優美な工芸品の区分を疑う——というバンドラの箱を開けるための巧妙な鍵なのだ。結局のところ、これらの概念は対立するものではないということが分かる。境界を曖昧にすることが目的なのだ。——ロバータ・スミス

 "Art With Baggage in Tow," *New York Times*, April 4, 2008.

2009	「ポップ・ライフ：マテリアル・ワールドのアート」テート・モダン（英国、ロンドン）、カナダ国立美術館（オタワ）[ex.cat.]
2010	「ムラカミ・ヴェルサイユ」ヴェルサイユ宮殿（フランス）[ex.cat.]

「ムラカミ・ヴェルサイユ」展は、ルイ14世の陽気で快活な、驚くべき芸術支援の延長線上にあるように見える。そして、これらの彫刻がこの宮殿に飾られている様子から、なにか遺伝的な繋がりが見えてくる。これは王政のバロック様式に囲まれた、民衆バロックの勝利なのだ。

 "The Prince and Mister Pointy," *New York Times*, October 30, 2010.

2012	「ムラカミーエゴ」アル・リワーク展示ホール（カタール、ドーハ）[ex.cat.] ★「ダブル・ヴィジョン—日本現代美術」モスクワ市立近代美術館（ロシア）、ハイファ美術館（イスラエル）、ティコティン日本美術館（ハイファ）[ex.cat.]
------	---

《五百羅漢図》は、2011年の東日本大震災が起きた後に構想されました。昔、災害があったとき、僧侶は苦しむ人々の間に宗教を広めるために絵画を用いました。私は《五百羅漢図》を、そうした歴史的な作品と同等のものだと考えています。これは慰めの絵です。おそらく、私の《ゲルニカ》なのです。——村上隆

 "Murakami Speaks!," *Murakami-Ego*, New York: Rizzoli Electa, 2012, p. 150.

2013	「タカシ・イン・スーパーフラット・ワンダーランド」プラトー（韓国、ソウル）[ex.cat.] ★「Re: Quest—1970年代以降の日本現代美術」ソウル大学校美術館（韓国）[ex.cat.]
2014	「死の国に射しこんだ『虹』の尻尾を踏んだ時」ガゴシアン（米国、ニューヨーク）
2015	「村上隆の五百羅漢図展」森美術館（東京）[ex.cat.]
2016	「村上隆のスーパーフラット・コレクション—蕭白、魯山人からキーファーまで」横浜美術館（神奈川県）[ex.cat.]
2017	「ムラカミbyムラカミ」アストルップ・ファーンリ現代美術館（ノルウェー、オスロ）[ex.cat.] 「ジ・オクトパス・イツ・イツ・オウン・レッグ」シカゴ現代美術館（米国、イリノイ州）、[2018] バンクーバー美術館（カナダ）、[2018] フォートワース近代美術館（米国、テキサス州）[ex.cat.] 「アンダー・ザ・ラディエイション・フォールズ」ガレージ・ミュージアム・オブ・コンテンポラリー・アート（ロシア、モスクワ）[ex.cat.] 「ディーブ・エンド・オブ・ユニバーズ」オルブライト=ノックス美術館（米国、ニューヨーク州バッファロー）

「村上隆：奇想の系譜 辻惟雄とボストン美術館のコラボレーション」ボストン美術館 (米国、マサチューセッツ州) [ex.cat.]

★「ジャパノラマ：1970年以降の新しい日本のアート」ボンビドゥー・センター・メッセ (フランス) [ex.cat.]

消費主義への関心は衰退したようだ。

その代わりに現代美術の意味を、何世紀も存続し時代を超越した

芸術品との繋がりの中に見出そうとする、

マクロな視点から捉えるようになった。

そして、生、死、スピリチュアリティ、真実といった、

過去のアーティストを導き、現代の人々の思想や

行動にも影響を及ぼす、より大きな問題と向き合い始めた。

————— マイケル・ダーリング

"Doom to Survive," *Takashi Murakami: The Octopus Eats Its Own Leg*, New York: Skira Rizzoli; Museum of Contemporary Art Chicago; Tokyo: Kaikai Kiki, 2017, p. 32.

2018 企画「バブルラップ：『もの派』があって、その後のアートムーブメントはいきなり『スーパーフラット』になっちゃうのだが、その間、つまりバブルの頃って、まだネーミングされてなくて、其処を『バブルラップ』って呼称するといろいろしっくりくると思います。特に陶芸の世界も合体するとわかりやすいので、その辺を村上隆のコレクションを展示したりして考察します。」熊本市現代美術館

2019 「ムラカミvsムラカミ」大館 (香港)
「ムラカミbyムラカミ」大竹富江文化センター (ブラジル、サンパウロ)

主なコレクション

金沢21世紀美術館 (石川)

ブロード美術財団 (米国、カリフォルニア州ロサンゼルス)

バード大学キュラトリアル・スタディーズ・センター (米国、ニューヨーク)

サムスン美術館リウム (韓国、ソウル)

ロサンゼルス・カウンティ美術館 (米国、カリフォルニア州)

シカゴ現代美術館 (米国、イリノイ州)

ロサンゼルス現代美術館 (米国、カリフォルニア州)

ボストン美術館 (米国、マサチューセッツ州)

ニューヨーク近代美術館 (米国)

ピノール財団 (フランス、パリ)

ピンチュク・アート・センター (ウクライナ、キエフ)

クインズランド・アートギャラリー (オーストラリア、ブリスベン)

サンフランシスコ近代美術館 (米国、カリフォルニア州)

トレド美術館 (米国、オハイオ州)

ウォーカー・アート・センター (米国、ミネソタ州ミネアポリス)

Selected Exhibitions

1991 *Takashi Murakami*, Aoi Gallery, Osaka, Japan
I Am Against Being for It, Gallery Hosomi Contemporary, Tokyo, Japan [ex.cat.]

1992 *Anomaly*, Röntgen Kunst Institut, Tokyo, Japan [ex.cat.]

1993 *Takashi Murakami: A Very Merry Unbirthday!*, Hiroshima City Museum of Contemporary Art, Japan [ex.cat.]
The Ginburart, Ginza, Tokyo, Japan [ex.cat.]

1994 *Which Is Tomorrow? – Fall in Love*, SCAI THE BATHHOUSE, Tokyo, Japan [ex.cat.]

Manga originated as “aimless (man)” pictures, something lowly in contrast to the “finished painting (honga)”; that said, nowadays in Japan, the high in our culture cannot be identified, much less the low. High culture is nowhere in sight. Art is no longer self-sufficient and there are no issues at hand. So as a way to make issues arise with a big bang, I used manga to face off art. ————— Takashi Murakami

*Artist Interview: Takashi Murakami," *Bijutsu Techo*, November 1994, p. 181.

1995 *Takashi Murakami*, Galerie Perrotin, Paris, France
TransCulture (46th Venice Biennale), Palazzo Giustinian Lolin, Venice, Italy [ex.cat.]

1996 *Takashi Murakami, Feature Inc., New York, USA*
Konnichiwa, Mr. DOB, Kirin Plaza Osaka, Japan
Wonder Festival 96 Summer, Tokyo Big Sight, Japan
2nd Asia Pacific Triennial of Contemporary Art, Brisbane, Australia [ex.cat.]

1997 *Cities on the Move*, Wiener Secession, Vienna, Austria, [1998] CAPC Musée d'art contemporain de Bordeaux, France, [1998] P.S.1 Contemporary Art Center, New York, USA, [1999] Louisiana Museum of Modern Art, Humlebæk, Denmark, [1999] Hayward Gallery, London, UK, [1999] Kiasma, Helsinki, Finland, [1999] The city of Bangkok, Thailand [ex.cat.]

1998 *Back Beat*, Blum & Poe, Santa Monica, CA, USA
★*Donai yanen! Et maintenant! La création contemporaine au Japon*, École nationale supérieure des Beaux-Arts, Paris, France [ex. cat.]
★*Tastes and Pursuits: Japanese Art in the 1990s*, National Gallery of Modern Art, New Delhi, India, [1999] Metropolitan Museum of Manila, the Philippines [ex.cat.]

1999 *The Meaning of the Nonsense of the Meaning, Center for Curatorial Studies, Bard College, New York, USA* [ex.cat.]
DOB in the Strange Forest, Parco Gallery, Tokyo, Japan, Parco Gallery, Nagoya, Aichi, Japan [ex.cat.]
Carnegie International 1999/2000, Pittsburg, PA, USA [ex.cat.]
Ground Zero Japan, Contemporary Art Gallery, Art Tower Mito, Ibaraki, Japan [ex.cat.]

Greetings. You are alive. [...] The exposed souls of the people living in Tokyo, in this post-Western society where meaninglessness is the reality, that are 1) childish, 2) poor, and 3) amateur; but it is these seemingly negative gadgets that are now becoming what is unique about TOKYO. TOKYO POP is making something original by linking the language of Tokyo to a more international language. I invite you to take a close look at these figures. ————— Takashi Murakami

*"Haikai kimi wa ikiteiru: Tokyo pop sengen" [Greetings, You Are Alive: Tokyo Pop Manifesto], *Kokoku Hihyo*, April 1999, p. 59.

Rooted in Japanese popular culture, Mr. Murakami's art communicates across borders in a media-driven era of global pop to which fashion, animation, music and electronic gadgetry from Japan have all contributed. ————— Edward M. Gómez

*"The Fine Art of Biting into Japanese Cuteness," *New York Times*, July 18, 1999.

2000 *Kaikai Kiki: Superflat, ISSEY MIYAKE MEN / AOYAMA, Tokyo, Japan*
Second Mission Project Ko², P.S.1 Contemporary Art Center, New York, USA
Cur. *SUPERFLAT*, Parco Gallery, Tokyo, Japan, Parco Gallery, Nagoya, Aichi, Japan [ex.cat.]
Painting at the Edge of the World, Walker Art Center, Minneapolis, MN, USA [ex.cat.]
★*Gendai: Japanese Contemporary Art – Between the Body and Space*, Center for Contemporary Art, Ujazdowski Castle, Warsaw, Poland [ex.cat.]

The world of the future might be like Japan is today —super flat. Society, customs, art, culture: all are extremely two-dimensional. ————— Takashi Murakami

*"The Super Flat Manifesto," in *SUPERFLAT*, trans. Office Miyazaki, Tokyo: Madra Publishing, 2000, p. 5.

2001 *Summon Monsters? Open the Door? Heal? Or Die?*, Museum of Contemporary Art, Tokyo, Japan [ex.cat.]
Takashi Murakami: Made in Japan, Museum of Fine Arts, Boston, MA, USA
Wink, Grand Central Station, New York, USA
★Cur. *SUPERFLAT*, MOCA Pacific Design Center, Los Angeles, CA, USA, Walker Art Center, Minneapolis, MN, USA, Henry Art Gallery, Seattle, WA, USA [ex.cat.]

“Superflat” is the best name for an art movement since—well, since Pop, [...] The name is market-savvy. It has retro-snap. It's wry. It takes the hoary critical arguments of the pre-Postminimal 1970s, which insisted on flatness as essential to the truth of painting, and gives them a shove: Oh, yeah? Superflat is more true. It's supertrue. ————— Christopher Knight

*"Flat-Out Profound," *Los Angeles Times*, January 16, 2001.

I'm looking for the crossing point between fine art and entertainment, [...] I have learned in Europe and America the way of the fine-art scene. Few people come to museums. Much bigger are movie theaters. The museum, that space is kind of old-style media, like opera. That's why I am really interested in making merchandise for ordinary people. — Takashi Murakami

Peter Marks, "A Japanese Artist Goes Global; Far-Flung Helpers Meet Demand for Takashi Murakami's Paintings," *New York Times*, July 25, 2001.

2002 **Kaikai Kiki: Takashi Murakami, Fondation Cartier pour l'art contemporain, Paris, France [ex.cat.]**
★Cur. *Coloriage*, Fondation Cartier pour l'art contemporain, Paris, France

Japan was always seeking new outlines from other cultures to fill that destitution. The country's desire for the latest fad from anywhere but within can be considered the repeated acts of temporarily treatment, of filling the void left by the Meiji Restoration. Japan forgot for a while that culture is not the act of painting within the lines, but of creating the lines, [...] This is the coloring book created by Japan, where there is no difference between "main" and "sub" cultures. I think it is meaningful to present this new bud of art in Paris, the cradle of Japonism. — Takashi Murakami

Takashi Murakami and Hélène Kelmachter, "Revised Takashi Murakami's Interview" (leaflet), trans. Charles Penwarden, *Kaikai Kiki: Takashi Murakami*, Tokyo: Kaikai Kiki, 2002, p. 11.

2003 *Happiness: A Survival Guide for Art and Life*, Mori Art Museum, Tokyo, Japan [ex.cat.]
2004 Liverpool Biennial 2004, UK [ex.cat.]
Cur. *Tokyo Girls Bravo*, Marianne Boesky Gallery, New York, USA

Critics with a mind to can find here a sly critique of the spectacular but arcane and self-gratifying world of *otaku*. My *Lonesome Cowboy* and his lactating companion *Hiropon*, 1997, take an *otaku* genre—the figurine—and by blowing it up to what, for *otaku* "purists," seem grotesque proportions [...], satirize the puerile obsessions of anime and manga subcultures. But they also simply magnify those obsessions, and the line between critique and celebration is so fine it hardly seems worth pursuing. — Kitty Hauser

"Superflat," *Artforum*, October 2004, p. 286.

2005 ★Cur. *Little Boy: The Arts of Japan's Exploding Subculture*, Japan Society Gallery, New York, USA [ex.cat.]

In the end Mr. Murakami has attempted psychoanalysis on a national scope in exhibition form [...] Those who visit it stand an excellent chance of having their understanding of Japan, its culture and its history profoundly shaken. — Roberta Smith

"From a Mushroom Cloud, a Burst of Art Reflecting Japan's Psyche," *New York Times*, April 8, 2005.

2007 ©MURAKAMI, Museum of Contemporary Art, Los Angeles, CA, USA, [2008] Brooklyn Museum, New York, USA, [2008] Museum für Moderne Kunst, Frankfurt, Germany, [2009] Guggenheim Museum Bilbao, Spain [ex.cat.]
Reflection, PinchukArtCentre, Kyiv, Ukraine [ex.cat.]

At the heart of Murakami's spectacular narrative is an allegory for society's unending desire for consumption, in which *Gero Tan* embodies this desire in a powerful image of sacrificial death. — Mika Yoshitake

"The Meaning of the Nonsense of Excess," ©MURAKAMI, Los Angeles, CA: Museum of Contemporary Art, 2007, p. 111.

Guardians of museum purity were outraged by the Murakami-Vuitton boutique when the show made its debut last fall at the Museum of Contemporary Art in Los Angeles, [...] But actually it's an ingenious key to the Pandora's box of Mr. Murakami's art and stuffed with questions of art and commerce, high and low, public brand and private expressions, mass production and exquisite craft. None of these, it turns out, are ever mutually exclusive. Fuzzing is the point. — Roberta Smith

"Art With Baggage in Tow," *New York Times*, April 4, 2008.

2009 *Pop Life: Art in a Material World*, Tate Modern, London, UK, National Gallery of Canada, Ottawa [ex.cat.]
2010 MURAKAMI VERSAILLES, Palace of Versailles, France [ex.cat.]

To us, "Murakami Versailles" looks like a blithe and cheerful extension of Louis XIV's remarkable patronage of the arts. And there is something almost hereditary about the look of these sculptures in this place. They are triumphs of populist baroque framed by regal baroque.

"The Prince and Mister Pointy," *New York Times*, October 30, 2010.

2012 **Murakami-Ego**, QM Gallery ALRIWAQ, Doha, Qatar [ex.cat.]
★*Double Vision: Contemporary Art from Japan*, Moscow Museum of Modern Art, Russia, Haifa Museum of Art, Israel, Tikotin Museum of Japanese Art, Haifa [ex.cat.]

The 500 Arhats was conceived after 3/11—the Japanese earthquake in 2011. In the old days, when there was a disaster, the monks had paintings made that they used to promote religion among the people who were suffering. I consider *The 500 Arhats* to be an equivalent of those historical works. It's a consolatory painting—it's my *Guernica*, perhaps. — Takashi Murakami

"Murakami Speaks!" *Murakami-Ego*, New York: Rizzoli Electa, 2012, p. 150. (existing translation)

2013 **Takashi in Superflat Wonderland**, Plateau, Seoul, South Korea [ex.cat.]
★Re: *Quest – Japanese Contemporary Art since the 1970s*, Seoul National University Museum of Art, South Korea [ex.cat.]
2014 **In the Land of the Dead, Stepping on the Tail of a Rainbow**, Gagolian, New York, USA
2015 **Takashi Murakami: The 500 Arhats**, Mori Art Museum, Tokyo, Japan [ex.cat.]
2016 *Takashi Murakami's Superflat Collection – From Shohaku and Rosanjin to Anselm Kiefer*, Yokohama Museum of Art, Kanagawa, Japan [ex.cat.]
2017 **Murakami by Murakami**, Astrup Fearnley Museet, Oslo, Norway [ex.cat.]
The Octopus Eats Its Own Leg, Museum of Contemporary Art Chicago, IL, USA, [2018] Vancouver Art Gallery, Canada, [2018] Modern Art Museum of Fort Worth, TX, USA [ex.cat.]
Under the Radiation Falls, Garage Museum of Contemporary Art, Moscow, Russia [ex.cat.]
The Deep End of the Universe, Albright-Knox Art Gallery, Buffalo, NY, USA
Takashi Murakami: Lineage of Eccentrics – A Collaboration with Nobuo Tsuji and the Museum of Fine Arts, Boston, Museum of Fine Arts, Boston, MA, USA [ex.cat.]
★*Japanorama: Nouveau regard sur la création contemporaine (Japanorama: A New Vision on Art since 1970)*, Centre Pompidou-Metz, France [ex.cat.]

[...] The interest in consumerism in particular has waned, replaced with a more macroscopic view that attempts to place the meaning of contemporary art in a continuum with the timeless artifacts that have survived centuries, and to consider the big issues of life, death, spirituality, and truth that guided the artists then and occupy the daily thoughts and actions of everyday people. — Michael Darling

"Doom to Survive." *Takashi Murakami: The Octopus Eats Its Own Leg*. New York: Skira Rizzoli; Museum of Contemporary Art Chicago; Tokyo: Kaikai Kiki, 2017, p.32.

2018 Cur. *Bubblewrap: After Mono-ha, the next established art movement is Superflat, but that means the interim period overlapping the years of Japan's economic bubble has yet to be named, and I think calling it "Bubblewrap" suits it well. It especially makes sense if you incorporate the realm of ceramics. This show will contemplate this period through works including those from Takashi Murakami's collection.*, Contemporary Art Museum, Kumamoto, Japan
2019 **MURAKAMI vs MURAKAMI**, Tai Kwun, Hong Kong
Murakami by Murakami, Instituto Tomie Ohtake, Sao Paulo, Brazil

Collections

21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa, Ishikawa, Japan
The Broad Art Foundation, Los Angeles, CA, USA
Center for Curatorial Studies, Bard College, New York, USA
Leeum, Samsung Museum of Art, Seoul, South Korea
Los Angeles County Museum of Art, CA, USA
Museum of Contemporary Art Chicago, IL, USA
Museum of Contemporary Art, Los Angeles, CA, USA
Museum of Fine Arts, Boston, MA, USA
The Museum of Modern Art, New York, USA
Pinault Collection, Paris, France
PinchukArtCentre, Kyiv, Ukraine
Queensland Art Gallery, Brisbane, Australia
San Francisco Museum of Modern Art, CA, USA
Toledo Museum of Art, OH, USA
Walker Art Center, Minneapolis, MN, USA